

## 2 年次老年看護学実習における学生の学びと指導上の課題

### —実習のまとめのグループワークから—

木下 香織<sup>1)</sup>\*・古城 幸子<sup>1)</sup>

1) 看護学科

(2006年11月7日受理)

本研究の目的は、2年次老年看護学実習について、まとめのグループワークの学習効果と今後の実習指導上の課題を明らかにすることである。グループワークでの学びは「個別性」のほか、高齢者の身体面・精神面・社会面の理解などの共通したキーワードで表現された。グループワーク後の学生個人の記録からは7つのカテゴリーが抽出され、【学習の方法】【学習への意欲】【共有した思い】はグループワーク中の学生の思考や感情に、【高齢者理解】【認知症の理解】【高齢者をとりまく環境】【ケア方法】はグループワークで学んだ具体的な内容に関連すると考えられた。また、61名の学生から実習中に解決できなかった疑問が75場面記載された。高齢者に対するケアスタッフの言動やケアに関する内容が多かったが、疑問解決のために行動した学生は少なかった。2年次実習における疑問解決への指導方法や問題解決能力の向上へとつながるような教育方法の検討の必要性が示唆された。

### はじめに

平成8年の看護基礎教育カリキュラムの改正により、老年看護学実習は時間数が4単位に増え、専門分野としての「老年看護学」が成人看護学から独立を果たした。高齢社会を背景として、老年看護学に対する期待が高まった結果である。老化に伴う高齢者の身体的・精神的・社会的な変化、高齢者をとりまく家族をはじめとした社会的状況、老年期の健康障害とそのケアなど、老年看護学での学習内容は幅広い。しかし、現在、青年期に生き、高齢者との同居経験の少ない看護学生にとって、高齢者理解は容易ではなく、臨地実習での関わりが多くての学びとなっている。

A短期大学看護学科では、老年看護学実習4単位を2年次1単位と3年次3単位の2期に分けて行なっている。2年次の実習では、慣れ親しんだ言葉や地理的な感覚の中で高齢者とかかわり、学

生自身や家族に引きつけながら高齢者ケアの現状と課題について考える機会とするため、学生の出身地の高齢者施設で実習を行なっている。学生はそれぞれの出身地のさまざまな高齢者施設で実習を行なうため、個々の学生の経験した内容もまた学びも異なる。そこで、2年次老年看護学実習のまとめとして行なったグループワークの内容を分析し、その学習効果と実習指導上の課題の明確化を図った。

### 1. 研究目的

学生が出身地の高齢者施設で行なう2年次老年看護学実習について、グループワーク（以下、GWとする）を活用したまとめの学習効果と今後の実習指導上の課題を明らかにする。

\*連絡先：木下香織 看護学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

## II. 2年次老年看護学実習の目的・実習方法およびまとめについて

### 1. 2年次老年看護学実習の目的・実習方法について

2年次実習は夏季休暇中の4日間以上の期間で、学生の出身地の高齢者施設で実習を行なう。実習施設には、学生が2年次春季休暇に老年看護学Ⅱの単元「地域システム論」の課題で出身地の高齢者施策を調査<sup>1)</sup>した後、学生の希望施設に実習依頼をしている。

実習目的は「老年看護の対象である高齢者を、総合的に広い視野で捉え理解する」とし、実習目標の「8つのP」を定めている<sup>2)</sup>。2年次実習では、8つの目標のうち、①高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する(Person)、③家庭、介護保険施設など、高齢者の生活の場を理解する(Place)、⑧高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する(Person-in-environment)の3点に重点をおいて理解を深めるよう説明している。

### 2. 2005年度2年次老年看護学実習の実習施設について

2005年度2年次生62名が実習を行なった高齢者施設は図1に示すとおりである。実習先は多機能な施設が多く、各施設のサービス機能数は平均で2.7であった。学生の実習先で多かったサービス機能は、ショートステイが29名、特別養護老人ホーム、デイサービスがそれぞれ25名、老人保健施設が19名であった。介護保険施設、通所系サービスを中心にさまざまな機能をもつ施設での実習に

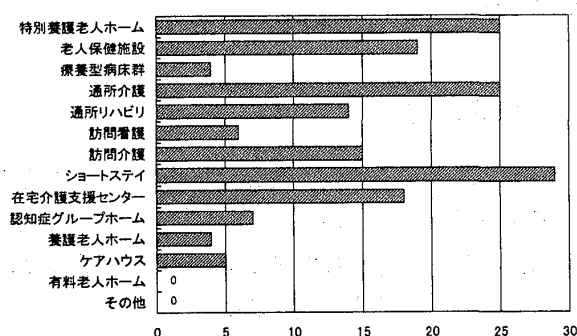


図1 2年次演習の演習先のサービス機能 (のべ人数)

なっている。

### 3. 2年次老年看護学実習後のまとめについて

夏季休暇後の2005年10月3日に、1グループ7名程度の9グループに分かれ、1コマで2年次実習のまとめを行なった。GWは30分間で、実習目標①高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する(Person)について、実習記録をもとに学生個々の学びを発表しあった。その後の60分間で、GWで印象に残った内容をグループごとにキーワードとして3つ挙げ、キーワードに関連する具体的なエピソードとともに発表しあった。

## III. 研究方法

### 1. 対象

2005年度のA短期大学看護学科2年次生62名。

### 2. 方法

各グループの討議内容はA4用紙1枚に記録し提出することとした。また、学生個々に、GWを通しての学びや気づき、実習中に解決できなかった疑問があればその場面の状況や問題解決のために学生がとった行動については、自由記載とした。

### 3. 分析

各グループが発表した学びの3つのキーワードと討議記録から、学生の高齢者理解についての学びや関心の高い内容について分析した。学生が記載したGWの学びや気づきをコード化し、意味の類似性によりカテゴリー化を行った。また、学生が記載した実習中に解決できなかった疑問は、場面の状況を水野らの分析枠組み<sup>3)</sup>を用いて分析した。これらの分析にあたっては、研究者間で検討を行なった。

### 4. 倫理的配慮

調査対象者に、本研究の趣旨と記載内容は研究以外には使用しないこと、研究への協力は自由意志により個人評価や成績評価とは無関係であること、研究に協力しないことで不利益は被ることがないよう説明し、同意を得た。

#### IV. 結果

##### 1. 各グループの3つの学びのキーワード

各グループから発表された学びのキーワードは表1に示すとおりである。キーワードは27個で、9グループのうち6グループが「個別性」を挙げている。

「個別性」の具体的なエピソードは、「健康レベルや自立度、その日の精神状態などによりその人に一番適した援助は変化していく」、「要介護度が同じでも年齢、性別、ライフヒストリーなどが異なるため個別性があることを学んだ」などが討議記録に記されていた。

その他のキーワードは、「老化による身体への影響」「身体の衰えに対する不安がある」など高齢者の身体面、「孤独」「高齢者の想い」「行動の裏に隠れた想い」などの高齢者の精神面、「家族との絆」「施設での利用者の関係性」など高齢者の社会面、「自尊心」「一人の人として尊重、理解する」など倫理的な内容、「生きがい」「今までの生活の継続」など高齢者のQOLに関するキーワードが挙げられていた。すべてのキーワードとエピソードを表2に示した。

##### 2. グループワークでの学生の学びや気づき

62名の記録から、GWの学びや気づきとして、151のコードを抽出した。意味の類似性により、31のサブカテゴリーに分類し、7つのカテゴリーに類型した。カテゴリー、サブカテゴリーとコードの記述例を表3に示す。コードは「」、サブカテゴリーを< >、カテゴリーを【】と表記する。抽出された7つのカテゴリーは、GW中の学

生の思考や感情に関連する【学習の方法】【学習への意欲】【共有した思い】と、学生がGWで学んだ具体的な内容に関連する【高齢者理解】【認知症の理解】【高齢者をとりまく環境】【ケア方法】であった。

##### 1) 学習の方法

GWでの学びや気づきの中で最も多かった67コードから【学習の方法】が抽出された。23コードから<新たな学びが得られた>、14コードから<共通の学びを確認できた>、9コードから<経験を意識化できた>、8コードから<学びを共有できた>、7コードから<自分自身を反省した>、4コードから<学びが多様であった>、2コードから<学習が深まった>を抽出した。

<新たな学びが得られた>では、「自分が気づかなかった新たな学びが得られた」「実習施設が違うので自分の知らないことがたくさん分かった」など、実習施設の異なる学生が情報交換することで学びが得られていた。<共通の学びを確認できた>では、「実習施設は違うが学びは共通することがあった」「学びや感想は同じで大切なことは共通していると思った」など、同様の学びを得ていることを学生が相互に感じていた。<経験を意識化できた>は、「他の学生の発表を聞いて忘れていた学びを思い出した」「他の学生の意見を聞くうちに実習中に目にしながら素通りしていたことに気づけた」などの記載があり、他の学生の学びが刺激となって実習中の「経験」を「学び」と意識化できていた。<学びを共有できた>は、「他の学生の体験を共有できた」「みんなの体験を聞いてよかった」など、学生は意見を交換して学びを共有していた。<自分自身を反省した>では、「新しい発見ができたことで自分に欠けていたものに気づけた」「他の学生の学びのように自分の学びは深くなかった」などの記載があり、謙虚に自己を振り返る学生の姿勢が表現されていた。<学びが多様であった>では、「同じキーワードでも学びの内容は異なる」「プライバシーの保護や個別性と一言で言ってもいろいろな見方ができる」など、<学習が深まった>は、「自分が困った場面と同じような学生の経験を聞いて参考になった」「自分も感じていたことや考えたことを改め

表1 発表された学びの3つのキーワード

グループ	3つのキーワード
1	「生きがい」「自尊心」「老化による身体への影響」
2	「個別性」「身体的問題」「認知症高齢者への関わり方」
3	「プライバシー」「個別性」「家族との絆」
4	「個別性」「信頼関係」「孤独」
5	「個別性」「人権」「施設」
6	「観察が大切」「個別性」「精神面の理解の難しさ」
7	「高齢者の想い」「家族との関係」「利用者の関係性」
8	「個別性」「今までの生活の継続」「耳を傾け聴き、受け入れる」
9	「言葉の裏に隠れた想い」「身体の衰えに対する不安がある」「一人の人として尊重、理解する」

表2 各グループのキーワードエピソードの例

	キーワード	エピソード
個別性	個別性	要介護度が同じでも年齢、性別、ライフヒストリーなどが異なるため個別性がある。
	個別性	個人個人の特徴や生活習慣に合わせたケアで、生活における楽しみが増えることでその人らしさが生まれてくる。
	個別性	健康レベルや自立度、その日の精神状態などによりその高齢者に一番適した援助は変化する。
	個別性	身体的にどこまでできるのか、個人の癖や性格も把握する。認知症高齢者がいまどの時代にいるのか、背景を考え、それによって話をあわせる。
	個別性	リーダー的な存在の人もいて、生きてきた背景の違いを理解することが大切。
身体面	身体的問題	視力、聴力、体力の低下。表情筋の収縮がしわで判別しづらいため表情が乏しい
	老化による身体への影響	薬の作用が身体に及ぼすこと。
精神面	孤独	「帰りたい」と荷物をまとめて帰る準備をする高齢者が多かった。デイサービス・デイケアでは、「帰ったら一人なので帰たくない」と話していた。
	高齢者の想い	身体的に介護が必要だとこちらが判断しても、高齢者はそう思っているとは限らないので、高齢者自身の気持ちを尊重しなければならない。
	言葉の裏に隠れた想い	暴言を吐いた裏には「話を聞いてもらいたい、側にいてもらいたい」という気持ちがあるのではないかな。
	精神面の理解の難しさ	認知症のある利用者が多く、外見や少し話したくらいでは、本当の気持ちを理解し難かった。一見元気そうに見えても、こちらの思い込みで決めつけるのではなく、高齢者とコミュニケーションをとることが大切。
社会面	家族との絆	長期入所の高齢者は、家族の面会をととても楽しみにし、面会の日は何時間も前から身だしなみを整え、掃除して、家族が来るのを心待ちにしている。家族の存在が高齢者に大きな力を与えたり、悲しみを与えて元気をなくしてしまったりする。
	家族との関係	ショートステイを利用することで「老老介護」の負担の軽減になる。
	施設での利用者の関係性	新しい利用者が溶け込めなかったり、高齢者間での上下関係もある。
	信頼関係	スタッフと利用者との信頼関係はしっかりと聞くこと、利用者同士の信頼関係はお互いが励みになる。
	施設	アットホームなところ、施設によって雰囲気が違う。金額によってサービスも違っていた。利用者と介助者の仲が良い。
倫理的 内容	プライバシー	完全個室の施設もあれば集団で生活している施設もある。その日の体調や精神状態によって、プライバシーをどれだけ見守るかが変わっていた。また、高齢者の反応や感じ方もさまざまだった。
	人権	デイサービスなど団体行動では時間が決められ、制限され、自由が少ない。
	自尊心	排泄や入浴の場面で、高齢者の自尊心を傷つけないようにする。
	一人の人として尊重、理解する	スタッフは高齢者の「やりたい」という意思を尊重していた。援助を必要とする高齢者も、自らの意思をしっかりとって行動しており、尊重し理解することが大切。
QOL	生きがい	施設の中でも生きがいを見つけることができると楽しい。
	今までの生活の継続	家具などを持ち込むことで、施設に入所する前の高齢者の生活を入所後も継続することは、安心感につながる。
看護	観察が大切	高齢者のニーズにあった援助を提供するためには、観察してその高齢者を理解する必要がある。体調が変化しやすいため、こまめな観察が必要。
	認知症高齢者への関わり方	関わる時の精神状態をどのようにその方をとらえればいいのかわからなくなったが、接していくうちにその時々に応じて対応し、ありのまま受け入れればよいと思った

表3 グループワークによる学生の学び

コード数: 151

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一例
学習の方法 (67)	新たな学びを得られた (23)	自分が気づけなかった新たな学びを得られた
	共通の学びを確認できた (14)	実習施設は違うが学びは共通することがあった
	経験を意識化できた (9)	他の学生の発表を聞いて忘れていた学びを思い出した
	学びを共有できた (8)	他の学生の体験を共有できた
	自分自身を反省した (7)	新しい発見ができたことで自分に欠けていたものに気づけた
	学びが多様であった (4)	同じキーワードでも学びの内容は異なる
	学習が深まった (2)	自分が困った場面と同じような経験を聞いて参考になった
学習への意欲 (4)	学習意欲が湧いた (4)	これから勉強する中で今日のことを思い出してしっかり勉強したい
共有した思い (4)	同じ思いをしていた (4)	自分が抱えていた不安をもみんなも持っていたことがわかった
高齢者理解 (30)	精神面が理解できた (13)	多くの高齢者と関わり、短期間でも精神面の理解がたくさんあった
	高齢者は個性が大きい (6)	高齢者の個性は、人生で培ったものや身体・精神・社会面の問題により、自分たちよりも複雑だと思った
	高齢者理解 (4)	高齢者の理解が、みんなの発表を聞いていく中で深まった
	筋肉の衰えによる表情の変化 (3)	表情筋が弱くなるので無表情になりやすい
	高齢者観が変化した (2)	グループワークの前後で高齢者の見方に変化があった気がした
	生活史理解の大切さ (2)	その人が生きてきた時代背景を含めて理解することが大切
認知症の理解 (7)	認知症高齢者への対応 (4)	認知症高齢者の行動の裏にはメッセージや思いがある
	認知症症状への生活史の反映 (2)	認知症高齢者の言動には、個人の生活史が反映される
	認知症症状の理解 (1)	経験しなかった認知症高齢者のさまざまな症状があることがわかった
高齢者を とりまく環境 (18)	生活の場の理解 (5)	自分たちの生活と同じように、共同生活の中にも競争があり、もめごとが起こる
	施設の種類などによる違い (5)	自分の実習施設では少ない、ADLの高い高齢者の施設での大変さを聞いた
	高齢者を取りまく人間関係 (5)	利用者とスタッフの信頼関係だけでなく利用者同士の信頼関係も大切
	実習施設の特徴 (1)	他の実習施設について聞くことで、自分の実習施設の特徴を知った
	看護と介護 (1)	看護職と介護職が協働しなければ高齢者に負担がかかる
	現場の課題 (1)	職員の人数不足を感じた
ケア方法 (21)	個別的なケアが大切 (9)	個性を見極めてケアしていかなければならない
	高齢者への人権の配慮 (5)	生きがいを持つことは大切。一人一人したいことができるよう援助することが必要だと思った
	具体的な事象を学んだ (3)	ケンカの際のスタッフの対応を学んだ
	コミュニケーションの大切さ (1)	コミュニケーションの大切さ、難しさが身にしみた
	精神的な援助 (1)	億劫に感じがちな高齢者にどのように援助していくかが大切
	生活の工夫 (1)	高齢者が生活していくための工夫がたくさんあると知った
	多角的な視点 (1)	1つの視点だけでなく、いろいろな可能性を考えて接することが大切

て実感し、学びを深めることができた」であった。

## 2) 学習への意欲

「これから勉強する中で今日のことを思い出してしっかり勉強したい」「次の実習ではGWの学びを頭に入れて新たな着眼点で高齢者をみていきたい」などの4コードから<学習意欲が湧いた>、【学習への意欲】を抽出した。

## 3) 共有した思い

「自分が抱えていた不安をみんなも持っていたことがわかった」「病院での実習ではなかったのに戸惑いもあったが、そう思っていたのは自分だけではなかったと安心した」などの4コードから<同じ思いをしていた>、【共有した思い】を抽出した。

## 4) 高齢者理解

30コードから【高齢者理解】が抽出された。13コードから<精神面が理解できた>、6コードから<高齢者は個性が大きい>、4コードから<高齢者理解>、3コードから<筋肉の衰えによる表情の変化>、それぞれ2コードから<高齢者観が変化した>、<生活史理解の大切さ>を抽出した。

<精神面が理解できた>では、「多くの高齢者と関わり、短期間でも精神面の理解がたくさんあった」「生きがいや不安、寂しさは誰もが持っていた」「老健や病院など施設で生活する高齢者の『家に帰りたい気持ち』を改めて感じた」など、高齢者の精神面の特徴を理解しあっていた。<高齢者は個性が大きい>は、「高齢者の個性は人生で培ったものや身体・精神・社会面の問題により、自分たちよりも複雑だと思った」「同じ施設に生活していても、個性があるため生活の仕方が違う」などであった。<高齢者理解>は、「高齢者の理解が、みんなの話を聞く中で深まった」「『ありのまま受け入れる』ことは高齢者がどのように感じ考えているかを理解し受け入れることだと学んだ」などであった。<筋肉の衰えによる表情の変化>は、「表情筋が弱くなるので無表情になりやすい」など、いずれも老化現象に伴う表情の変化についての記載であった。<高齢者観が変化した>は「GWの前後で高齢者の見方に変化があった」「みんなそれぞれがいろいろな経験をし、高齢者に対する見方が変わったのではないかと思

う」と、主観的・客観的に高齢者観の変化を感じていた。<生活史理解の大切さ>は「その人が生きてきた時代背景も含めて理解することが大切」「個人の背景を知らないと行動の理解ができない」であった。

## 5) 認知症の理解

7コードから【認知症の理解】が抽出された。4コードから<認知症高齢者への対応>、2コードから<認知症症状への生活史の反映>、1コードから<認知症症状の理解>を抽出した。

<認知症高齢者への対応>では、「認知症高齢者の行動の裏にはメッセージや思いがある」「認知症高齢者の対応で困ったが、他の学生も同じような経験をし、その結果も知れた」などで、学生が相互に経験を話し合うことで学びが深められていた。<認知症症状への生活史の反映>は、「認知症高齢者の言動には、個人の生活史が反映される」「認知症高齢者の生活史と現在の言動との関係について理解することが大切」であった。<認知症症状の理解>は「経験しなかった認知症高齢者のさまざまな症状があることがわかった」であった。

## 6) 高齢者をとりまく環境

18コードから【高齢者をとりまく環境】が抽出された。それぞれ5コードから<生活の場の理解>、<施設の種類などによる違い>、<高齢者を取り巻く人間関係>を、それぞれ1コードから<実習施設の特徴>、<看護と介護>、<現場の課題>を抽出した。

<生活の場の理解>では、「自分たちの生活と同じように、共同生活にも競争があり、もめごとが起こる」「他人同士の生活によるトラブルがある」など、生活の場である高齢者施設の日常を感じていた。<施設の種類などによる違い>は、「自分の実習施設では少ない、ADLの高い高齢者の施設での大変さを聞いた」「施設によって感じたことが違う」などであった。<高齢者を取り巻く人間関係>は「利用者とスタッフの信頼関係だけでなく利用者同士の信頼関係も大切」「家族と利用者の関係は切れない」などで、高齢者を取り巻く家族、スタッフ、他の利用者とのさまざまな人々との関係があることを学んでいた。<実習施設の特徴>は「他の実習施設について聞くことで、自分

の実習施設の特徴を知った」、＜看護と介護＞は「看護職と介護職が協働しなければ高齢者に負担がかかる」、＜現場の課題＞は「職員の人数不足を感じた」であった。

#### 7) ケア方法

21コードから【ケア方法】が抽出された。9コードから＜個別的なケアが大切＞、5コードから＜高齢者の人権への配慮＞、3コードから＜具体的な事象を学んだ＞、それぞれ1コードから＜コミュニケーションの大切さ＞、＜精神的な援助＞、＜生活の工夫＞、＜多角的な視点＞を抽出した。＜個別的なケアが大切＞では、「個別性を見極めてケアしていかなければならない」「個人にあったケアを見極める難しさを感じた」など、個別性のあるケアの必要性、重要性を感じていた。＜高齢者の人権への配慮＞は、「生きがいを持つことは大切。一人一人したいことができるよう援助する必要があると思った」「もめごとには双方が納得するように解決しなければならない」などで、高齢者の自立を支援し、自尊心に配慮することの大切さを学んでいた。＜具体的な事象を学んだ＞は「ケンカの際のスタッフの対応を学んだ」「入所時の対応が高齢者の新生活のスタートを左右する」などであった。＜コミュニケーションの大切さ＞は「コミュニケーションの大切さ、難しさが身にしみた」、＜精神的な援助＞は「億劫に感じがちな高齢者にどのように援助していくかが大切」、＜生活の工夫＞は「高齢者が生活していくための工夫がたくさんあると思った」、＜多角的な視点＞は「1つの視点だけでなく、いろいろな可能性を考えて接することが大切」であった。

#### 3. 学生が実習中に解決できなかった疑問など

62名中61名の学生が実習中に解決できなかった疑問の場面について記載していた。記載された場面は75場面で、10名の学生は2～4の複数の場面について記載していた。学生が解決できなかった疑問は、前述の枠組みで分析した結果、表4のように分類された。

##### 1) 医療・看護体制に関するもの

最も多く記載された場面は、医師の言動や看護職の態度などの『医療・看護体制に関するもの』

が45件（60%）で、看護者の高齢者に対する言動やケアについてのI-1看護について35件、I-2プライバシーの保護2件、I-3感染予防対策3件で、合わせて「I看護」に関するものが40件であった。「I看護」に関する記述は『医療・看護体制に関するもの』の88.9%を占めた。

I-1看護についての疑問の場面は、“高齢者を子ども扱いしているのではないかと感じた” “スタッフが利用者と友達感覚のような話し方に違和感があった” “食事介助中に利用者の前でまったく関係のない話をスタッフ同士でしていたことが気になった” など、スタッフの援助者としての態度に疑問を感じた場面が13件あった。“何度も同じことを言われる高齢者に適当に相槌をうって無視していた” “何度もトイレに行きたいと訴える認知症高齢者への対応に疑問を感じた” などの認知症高齢者への対応の場面が5件、“高齢者からの依頼をスタッフに伝えると「いつものことだから流したらいい」と言われた” “訪問サービスに同行した際、利用者は楽しみにされていたがスタッフは義務的で冷たい感じがして違和感を感じた” などの高齢者への対応に疑問を感じた場面が5件あった。その他、“食事介助が介助者のペースになっていた” “高齢者の口からあふれたペースト食を口の中に押し込むのは良いことなのか” などの食事援助場面が4件、“身体拘束禁止のため、リフト浴中に安全ベルトを使用していなかったが、高齢者は不安そうだった” など安全対策に関する場面が2件、“利用者が食堂にはったらかしにされているイメージがして、もう少しコミュニケーションがとれたらいいのと思った” など高齢者の余暇時間の援助について2件、“入浴が流れ作業になっている” “徘徊のある認知症高齢者を転倒防止のために椅子とテーブルで動けなくすることに疑問を感じた” などであった。

I-2プライバシーの保護についての疑問は“入浴時、仕切りがない状態で更衣をしていたので、プライバシーの配慮に疑問を抱いた” など、入浴介助の場面であり、I-3感染予防対策については“口腔ケアを手袋なしに口腔ティッシュで行なっていた。経済的な理由からかと思うと質問できなかった” などであった。

表4 学生の実習中に解決できなかった疑問の場面

分 類			件数		
医療看護体制に 関するもの	Ⅰ 看護	1 看護について	35	40	45
		2 プライバシーの保護	2		
		3 感染予防対策	3		
	Ⅱ 医療	1 医師の行動	0	3	
		2 他科との連携	0		
		3 他職種との連携	3		
	Ⅲ 環境	1 物品	0	2	
		2 病室環境	2		
	学生自身に関するもの	Ⅳ 知識・技術	1 知識の未熟さ	0	
2 技術の未熟さ			0		
3 自信のなさ (知識と技術)			0		
Ⅴ 援助		1 食事	0	24	
		2 排泄	0		
		3 睡眠	0		
		4 コミュニケーション障害患者	3		
		5 難しい状況	0		
		6 自立患者	0		
		7 治療を守れない患者	0		
		8 不安緩和	0		
		9 家族への対応	0		
		10 入浴	1		
		11 高齢者の性	5		
		12 認知症高齢者への対応	9		
		13 その他の対応	6		
Ⅵ 判断		1 情報収集	0	2	
		2 患者からの拒否	0		
		3 癌告知への対応	0		
		4 看護援助に関する判断	2		
		5 受け持ち患者以外への対応	0		
Ⅶ その他	1 教員との関係	0	4		
	2 その他	4			

Ⅱ医療では、水野の分類枠組みに該当しない内容があったため、Ⅱ-3他職種との連携を追加した。具体的な場面としては、“看護師と介護士が、以前のように共同するか、現在のように別々に働くかでギクシャクしていた”などが3件あった。Ⅲ環境は、Ⅲ-2病室環境について、“談話コーナーに電化製品の持ち込み禁止だったが、高齢者の不自由があると感じた”など2件あった。

## 2) 学生自身に関するもの

『学生自身に関するもの』は26件 (34.6%) であった。Ⅳ知識・技術に関する内容は全くなかった。Ⅴ援助に関するものが24件で『学生自身に関するもの』の92.3%を占めた。Ⅴ-3コミュニケーション障害患者以外には該当しなかったため、Ⅴ-10入浴、Ⅴ-11高齢者の性、Ⅴ-12認知症高齢者への対応、Ⅴ-13その他の対応を追加した。Ⅵ判断では



VI-4看護判断に関する判断が2件で、それ以外はなかった。

具体的な場面としてV-3コミュニケーション障害患者では、“訴えが聞き取れず、何度も聞き返したりあいまいに対応してしまったことがあった”など3件あった。V-10入浴は“入浴を嫌がる高齢者への対応がよかったのか”という内容であった。V-11高齢者の性は“男性利用者に「かわいい」「若い」と手や顔を撫でられた”“性に関する話題の対応に困った”など5件あり、性的な会話や直接的な更衣に対する援助に関する内容であった。V-12認知症高齢者への対応では、“認知症高齢者の言動が理解できないときに「そうですか」としか返答できなかった”“談笑していたが、急に赤い顔で怒られた。あとで認知症だと知らされた”など9件あった。V-13その他の対応では、“利用者同士の悪口の対応に困った”“他のスタッフの対応を真似て利用者からのデザートをもらったが、質問したら「断ることも大切」といわれた”など6件あった。

### 3) その他

Ⅶその他は4件（5%）であった。Ⅶ-1教員との関係は0件で、Ⅶ-2その他は“看護師と介護士の仕事異なるため、看護学生としてどう実習したらよいか”などの実習方法に関するものが2件、“「さっき看護師に～を頼んだがまだなのであんたがしてくれ」と声をかけられ対応に困った”“質問しても答えてもらえなかった”という内容であった。

## V. 考察

### 1. 2年次老年看護学実習での学生の高齢者理解

学生が発表した学びのキーワードは、9グループのうち6グループが「個別性」という同じキーワードを挙げたほか、高齢者の身体面・精神面・社会面の理解、倫理的な内容、高齢者のQOLなど共通した内容を示すキーワードであった。

合津ら<sup>4)</sup>は、2年次学生が老人保健施設で1名の利用者を受け持ち、日常生活援助を立案・実施する実習の学生レポートの分析から、学生は＜自立を求める援助＞などの具体的な実践方法について

学べていたと報告している。A短期大学の2年次実習では、学生はスタッフの実施するケアに参加・見学する実習方法であり、短期間で多人数の高齢者を対象とする実習であるため、個々人の社会的な背景の理解は難しい。しかし、多くの高齢者との関わりを通して“個別性の大きさ”を学び、精神面を中心に高齢者理解が深められていた。筆者らの調査で<sup>5)</sup>、3年次老年看護学実習の中で学生は、「人生の先輩として尊敬できる高齢者の姿」「高齢者の包容力と畏敬の念」「人格の尊重と自尊心を支援したい」など、高齢者理解と老年看護観を深める学びが得られることが確認できている。発表されたキーワードは同一、または類似しているが、その根拠として発表された経験は多様であり、高齢者の個別性の大きさを理解することにもつながると考えられる。実習経験の少ない2年次学生が、実習とGWを通して多様な高齢者像をイメージできることは有意義だと考える。

また、GWの学びや気づきから抽出したサブカテゴリー、カテゴリーと老年看護学実習目標から、学生のGWでの学びを図2のように構造化するこ

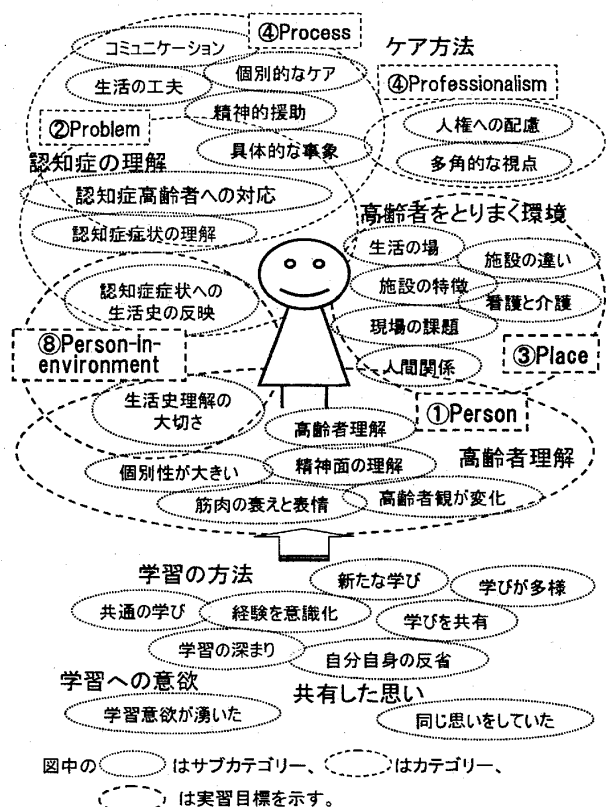


図2 グループワークによる学生の学びの構造

とができた。2年次実習の3つの目標のほか、②高齢者の健康に関わる問題について、総合的に理解する(Problem)、④高齢者の健康問題にかかわる専門職の援助過程を理解する(Process)、⑦高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解するに関連する学びが得られていることが確認できた。

## 2. グループワークによる学習効果

GWの学びや気づきから抽出した7つのカテゴリーのうち、【学習の方法】【学習への意欲】【共有した思い】は、GW中の学生の思考や感情に関連すると考えられた。今西<sup>6)</sup>は、小児看護学実習最終日にGWを実施した学生へのアンケートから、学生は実習の振り返りや学びの明確化・共有という部分で肯定的な意見が多かったと報告しており、GW中の学生の思考過程は共通する点が多い。

また、【学習の方法】のサブカテゴリー<経験を意識化できた>では、学生が実習中に経験していても‘学び’と感じていなかった事柄を、他の学生の発表の刺激を受けて‘学び’と意識化できることはGWの効果としてとても重要である。また、<自分自身を反省した>では自分自身の高齢者の関わり方や学びの整理の振り返り、<学習意欲が湧いた>では高齢者理解や認知症についての関心が高まっており、学生自身の能動的な学習態度につながると考えられる。

以上のことから、学生の多様な経験をもとに、共通した学びを確認しあい、新たな学びを得られるGWの学習効果を確認できた。

## 3. 学生の実習中の疑問の解決と今後の指導上の課題

62名のうち1名を除いてすべての学生から解決できなかった疑問が75場面提示され、10名の学生は2~4の複数の場面について記載していた。筆者らが3年次老年看護学実習での看護ジレンマを分析した<sup>7)</sup>結果、医療・看護体制、特にI-1看護についての記述が多かったが、2年次実習でも同様の傾向であった。I-1看護は、看護者の高齢者に対する言動やケアに関する内容で、スタッフの援

助者としての態度や認知症高齢者への対応などが多く挙げられていた。疑問解決のためにスタッフへの質問を行なった記載は少なく、4日間という短い実習期間にほとんどの学生が1人で各施設での実習に臨んでいるため、3年次生のような対処過程を辿ることは容易ではない。2年次生は実習経験も少ない学習段階でもあるため、3年次生以上に現場の状況的な文脈の吟味は困難であると考ええる。しかし、学生の感覚は高齢者や家族の立場により近いものであり、現実の問題として存在する可能性もある。現場の人的、時間的、物理的な要因が複雑に関係して生じることを理解しながらも、生活者としての違和感や疑問を感じられる感覚こそ、専門職として忘れてはならないと考える。

荻野<sup>8)</sup>は「臨床実習による体験のみでは道德倫理的感性や問題解決の動機は必ずしも高められない」と述べている。また、高野ら<sup>9)</sup>は3年制看護短大生の倫理的課題に対する認知と行動の経年的変化について調査し、「授業で学ばなかった内容に関しては『問題解決行動』がとりにくい」と述べている。学生が2年次実習で感じた疑問を「現場での看護・ケアの問題」ととらえて終わってしまうことのないよう、教育的な介入の必要性を強く感じ、2005年度は、学生が疑問を感じた場面として記載されていた高齢者の性や認知症高齢者への対応についての内容を後期の老年看護学Ⅱの講義内容に取り入れる試みを行なった。学習教材として3年次実習のなかで継続して取り上げていくなど、問題解決能力の向上へとつながるような教育方法の検討が必要である。

3年次実習では、学生のジレンマの解決過程を担当教員が現場スタッフとの関係調整を図りながら進めることが可能である<sup>10)</sup>が、2年次実習では教員が学生の疑問に即時的に対応することは困難である。また、学生の短期間で経験する事象への一面的な解釈が疑問につながっていることも少なくないと考えられ、2年次実習における疑問解決への指導方法を検討することも必要である。

## 引用文献

- 1) 古城幸子・木下香織：老年看護学の授業展

- 開－学生の出身地のフィールドワークを取り入れて、日本看護学教育学会誌，10（2），87，2000.
- 2) 古城幸子・木下香織：高齢者理解を深める臨地実習のねらい，新見公立短期大学紀要，20，1-8，1999.
- 3) 水野智子・今川詢子・長谷川真美他：看護ジレンマと看護倫理教育に関する研究（第2報）－基礎看護実習を経験した学生の分析－，埼玉県立衛生短期大学紀要，22，55-63，1997.
- 4) 合津順子・高野真由美：老人保健施設における老年看護学実習の学びと評価，神奈川県立よこはま看護専門学校紀要，2，34-40，2005.
- 5) 前掲2)と同じ
- 6) 今西誠子：小児看護学実習のまとめとしてのラベルワークに対する学生の認識，京都市立看護短期大学紀要，29号，15-20，2004.
- 7) 古城幸子・木下香織・馬本智恵：老年看護学実習での学生の看護ジレンマ-ジレンマの対処過程と教育的対応-，新見公立短期大学紀要，25，63-71，2004.
- 8) 荻野雅他：看護学生が臨床で遭遇する道徳的葛藤の同定，日本赤十字看護大学紀要，7，21-33，1993.
- 9) 高野里美・小野寺杜紀・波多野梗子：看護学生の倫理的課題に対する認知と行動－3年制看護短大生の経年的変化－，日本看護学教育学会誌，13，1，21-31，2003.
- 10) 前掲7)と同じ

**Learning of Sophomore Students in Elderly Nursing Practice  
and the Challenges in Instruction  
－From the Follow-up Group Work Meeting after Practice－**

Kaori KINOSHITA, Sachiko KOJO

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

**Summary**

The purpose of this research is clarifying the study effect of a group work and the challenges of instruction about Elderly Nursing Practice of sophomores. The common keywords in the group work were "individuality" and "understanding of elderly people's body, mentality, and sociality." Seven categories were extracted from students' individual records. Sixty one students point out 75 scenes as problems which they were not able to solve during exercise. The questions were mainly about the care workers' speech or conducts, or the care to elderly people. However, there were few students who acted to solve the problem.